

佐多稲子文学の会話表現にみるセクシュアリティについて

——「キャラメル工場から」・「素足の娘」・「或る女の戸籍」・「年譜の行間」を視座に——

北川 秋雄

一、夫婦の交情

佐多稲子は、夫窪川鶴次郎と田村俊子の一九三八年の恋愛事件を題材にした戦後の私小説「灰色の午後」¹で、夫婦の生々しい交情場面を取り上げている。第八章では、ヒロインの折江が、仕事場を外に持った夫の惣吉に恋人が出来たことを感じ取り、仕事を口実に恋人の元に行こうとするのを引き留めようとして性的に挑発する。しかし、惣吉は適度にあやしただけで出ていく。その場面は以下のようなものである。

「ね、寝ましょう」

ささやく折江を抱いたまま、彼女の身体を愛撫しはじめた。折江は惣吉の手にもまれる官能のしびれであえぎながら、

「いや、私、ひとり、厭ッ」

声をときらせ、惣吉の手を解こうとした。惣吉は、そういう折江を尙、追求し終わろうとするように放さず、

「今夜はこれで、ね、今夜はこれで」

とささやいた。ふれ合う近さに迫っている惣吉の目は吊って、その声は苦しげに、折江に謝罪しているように聞こえた。²

第二章には、情事の相手が発覚した直後に、折江が〈閨房の中だけに通用する言辞〉を口にして惣吉を誘い、〈「ほら、お前だって」／見破られる官能のたしかな証拠に、羞じはその中にはぐらかして折江は埋没していった。〉³ というような、共に情痴に溺れる場面がある。夫婦間の性交渉をあからさまに私小説化した作家には外村繁⁴がいる

が、昭和初期から活動を始めた女性作家としては、きわめて稀である。佐多文学におけるセクシュアリティ表現を概観することで、その先進性と特異性を見極めたい。

二、育児放棄、サディズム、もしくはドメスティック・バイオレンス

一九二八年発表の「キャラメル工場から」は、プロレタリア作家としてのデビュー作である。生活困窮の果て、娘に弱年労働を強いる没落小市民の一家の姿と、佐多の幼少時の労働体験を題材にして小説化している。

上京後のひろ子の一家は病人をかかえて寸詰りにつまっていた。父親はその間にビール会社の人夫になり、仕出し屋の雑役夫になった。それらの仕事が手近にあったから。それも肩が腫れ足がむくみそして止めた。祖母の内職では仕ようがなくなつた。その時ひろ子は五年生だった。

「ひろ子も一つこれへ行つて見るか」

ある晩父親がそう言つて新聞を誰にともなく投げ出した。茶碗を持ったまま新聞を覗いたひろ子は、あまり何気なさそうな父親のその言葉にまごつた。あるキャラメル工場が女工を募集していた。ひろ子はうつむいてしまい、黙つてむやみに御飯を口の中へつめこんだ。誰も黙つていた。

「どうした、ひろ子」

しばらくして父親はそう言つて薄笑つた。

「だつて学校が……」

そう言いかけるのと一緒に涙が出てきた。

「まだお前、可哀想に……」

「あなたは黙つてらっしゃい」

父親が祖母を頭からおつかぶせた。ひろ子の弟がなぐさめ顔で時々そつとひろ子をのぞいた。床の中で病人は仰向きに目をつぶっていた。あくる日ひろ子はその工場の事務室に、事務員と父親との交渉の間ぼつんとほうり出されていた。

ひろ子の母親死後、自身の身持ちが悪く、放蕩の結果、一家の生計が立ち行かず手詰まりになつた父親は、一三歳

のひろ子に学校を辞めて働いてみるかと無責任にも思い付きでつぶやく。〈だって学校が……〉と躊躇するひろ子、〈まだお前、可哀想に……〉と思ひやる祖母、〈あなたは黙ってらっしゃい〉と畳みかける父親の会話と、養家から出ていた学資をひろ子の父親に蕩尽され、苦学の挙句に肺結核で病床に伏す叔父の、ひろ子の将来を思い瞑目する姿が活写されている。

さらに、一月後、ひろ子の稼ぎを前に、ひろ子の必死の労働を徒勞と見なし、〈止せ止せ、しょうがないよ。——毎日電車賃を引きゃ残りゃしないじゃないか〉という父親の身勝手さと、次に住み込みで働いていた〈チャンそば屋〉に届く小学校の教師の、〈大したことでもないのだから、小学校だけは卒業する方がよからう〉という、生徒の内情も知らぬ能天気な言葉が、傷ついたひろ子に追い打ちをかける様が小説の結びに置かれる。

〈附箋がついてそれがチャンそば屋の彼女の所へ来た時——彼女はもう住み込みだった——それを破いて読みかけたが、それを掴んだままで便所にはいった。彼女はそれを読み返した。暗くてはつきり読めなかった。暗い便所の中で用もたさず、しゃがみ腰になって彼女は泣いた。〉とある。教育行為を放擲した教師と、教育を受ける機会を奪った父親の、ひろ子に対する酷薄な言葉の暴力が、便所でひとり泣くひろ子の姿を通して浮かび上がって来る。

一九三七年に発表された「乳房の悲しみ」は、わずか一年で終わった佐多の小堀槐三との結婚生活の体験が小説化されている。慶応大の学生で資産家の当主であった夫の病的な嫉妬・不安による深夜の暴力、翌日の哀願と謝罪の日々が繰り返される。身重の自分に暴力を振るうサディスティックな夫を持った二〇歳の新妻の受難劇である。第二章では次のように語られる。

〈私という女に絶えず何か、別の男性の幻影を想像し、それは病的なものにまでなった。理由なく、或いは言うに足らぬ、たとえば私の顔を他所の男が見ていたのに私が気づかず平気な顔をしていた、というようなことから、私を責める、という風になり、それも他人の知らぬ、二人きりの夜半の時間に発作的に起るのであった。そういう辛い日が私たちの生活になっていったのだ。〉とある。

さらに、戦後一年目に発表された「或る女の戸籍」¹⁰の第九章には次のような場面がある。

夜の二人だけの時になると、どこかの男が、イネをじいっと見ていたのにそれをイネが素知らぬ風をしていた、と言って、それがひどい彼の怒りになり、暴力になった。イネは、夫の振り上げる拳の下から絶望的な目の色で

巖を見た。

「あなたの子どもを生む身体ですよ」

巖は一瞬ひるむ。それから、イネの目の色の悲しい静かさに却って気持を逆に煽られて、逆上してゆく。(略) 巖には、イネの泣くのが、彼女ひとりの心の中にいよいよ閉じこもってゆくようにおもわれてくる。彼は恐怖を感じ出し、イネにすがってゆくように弱く言い出す。

「俺は病気なんだ。だがお前だって、だからと言って同情してはくれないだろう。今に子どもといっしょになつて俺に復しゅうするだろう」¹¹

佐多は、育児放棄、サディズムや、近年ようやく問題視されて来た夫婦間のドメスティック・バイオレンスを、昭和の早い時期に、いちはやく小説化しているのである。

三、デートDV、もしくは〈子殺し〉

佐多は、一九二六年の小堀との離婚に先立って、小堀との間に出来た葉子を連れて実家に戻る。離婚の協議中に、生活のためカフェーに勤めるが、そこで知り合った窪川鶴次郎と恋に落ちる。一九三八年に発表された「樹々新緑」¹²は、この時期の実生活を題材にした小説である。第八章では次のような場面がある。

彼女はこの頃暫く実家へ帰らないので、親たちに怪しまれるという気もあつたし、みち代の顔を見たいという、秘かに積み重なっていた願いで、今日の遅出の時間をうちへ行くつもりにしていた。そのつもりは彼女ひとりの心の中で固いのであつた。それは櫛本も承知していい筈だつた。櫛本の役所の帰りを、一度店へ出て掃除だけしてきた宗代が途中で待ち合せて、一緒に外で食事をした。(略) 二人は、不愉快な食事をして、食べ物やの店を出ると、ぐずぐずと別れるともなしに上野の山下を公園の方へ歩いてた。ゆるい傾斜をなしている広い道は閑寂で、右手の檜の木の下で蟬がしきりに鳴いていた。

「どうするのかね、来ないんなら、いつまでも一緒に歩いていても仕様がないだらう」

憤っているので余計に鼻すじが立ったように見える顔を振り向けて櫛本が言った。宗代はもしこれで櫛本が帰らせてくれるならばという願いで、頼むような色を浮べて、(略)

「あら、まだそんなこと言っているの。何のかのって言って、いつでも、どうしても自分の言うとおりにしようとするのね、一度位、私の我儘をとおして呉れたっていいじゃありませんか。いやだわ……」

と、宗代の言葉のまだ終らぬうちに、櫛本は、

「なにっ！」

と、叫んで、いきなり躍り上った。瞬間に宗代の前へ廻った我が足で彼女の足を払った。宗代は、はっとして櫛本の服の胸にしがみつき、倒れるのを防いだ。彼女のかざしていた琥珀織のまっ白な洋傘が急に横に倒れ、まっ蒼になった櫛本の顔が宗代の目に大きく映った。

「御免なさい。行くわよ。行くわよ」

自分も喘ぎながら夢中で櫛本をはずめた。

瞬間に行われた狂的な振るまいは、衆人の視線を集める間もなかったが、宗代は、身の隠しようもない白昼の広場で前後を忘れてしまう櫛本に恐れさえ抱いて、病人を連れるように櫛本の腕を取って急いだ。

激昂した感情のあとで、部屋へ帰ってきた櫛本は、濡れるような情緒にあふれていた。壁に喰っついて横坐りにうつむいて、情なく帯を解いていた宗代は、やがて堪えかねたようにすすり上げた。

「およし、泣くのは」¹³

宗代は暫く実家に帰らず、櫛本の部屋に泊まっていた。親の目も気になるし、乳児のみち代の顔も見たい思いでいっぱいである。今日は実家に帰ることも櫛本は了解していたにも関わらず、さて帰る段になると、激昂して白昼の公園で暴力を振るう。その場を取り繕うために櫛本の部屋に行くと、櫛本は二人でお茶でも飲もうと、昼の暑さにも構わず火をおこしたり、水を汲んだりして人が変わったように、甲斐甲斐しく宗代の世話を焼く。宗代は、どうして、あのように気が狂ったように猛りたつのか、櫛本の気持が分からず、〈悲しい目〉で彼を見るばかりである。

さらに、あるときには、実家で一泊して帰って来たときのことである。宗代を迎えて抱こうとした櫛本が急に表情を変えて宗代の肩を突き飛ばした。宗代の着物に、みち代のよだれの染みを見つけたからである。第二章には、次のような会話の場面がある。

「なんだ、その着物の肩は、よくもそんななりで帰ってきたもんだ。無神経にもほどがある。いったいどうし

「たんだ」

宗代は黒地の銘仙の羽織を手早く脱ぎ、部屋の隅へ放ったが、羞恥で頬をひきつらし、キラキラ光る視線で楯本にまとわりついていった。

「ごめんなさい。ほんとうにごめんなさい」

「そういう無神経さでこの部屋へ這入って来られては困る。たとえうちではみち代を負ぶうことがあったとしても、子供のよだれのしみついた着物のまんまで、俺に抱かれようなんて、あんまりだ。

「だから、だから、ごめんなさい」¹⁴

「乳房の悲しみ」でも、〈私〉が広介と出会う前に子供を抱いて付いた、着物の肩の汚れに気づいた広介の激昂が語られる。「或る女の戸籍」でも〈吉之助との生活に入り込んでゆきながら、イネは陽子への愛情に肉体の一部をもぎとられるほどの切なさを堪えている。ひとり店へ通うとき彼女は子どもばかり目についた。〉¹⁵と語られている。一九八三年に発表された「年譜の行間」において、佐多は〈葉子に対するあたしの母性愛が、窪川さんをさんざん悩ませた。窪川さんはあたしを葉子から取るうとする。〉¹⁶と述べている。

丸善の上司の紹介で結婚した小堀との地獄のような生活を解消して、自らの意思による恋愛で結びついた窪川が、前夫との子である葉子に嫉妬し、佐多にデート・ドメスティック・バイオレンスを振るうとは、なんとも因果な展開である。

ところで、杉山幸丸『子殺しの行動学』¹⁷は、インド亜大陸に生息する狭鼻猿ハヌマンラングールについて、単雄群で雌に近づけないあぶれ雄が多数いると、〈種内子殺し〉が行われることを明らかにしている。そして、それは〈あぶれ雄による群れ乗っ取りのあとで乗っ取り雄によって起こされること、子殺しのあとで子を失った雌が発情し、殺し屋と結ばれてその子を宿すこと〉がフィールドワークの結果、確認されたとしている。さらに杉山は〈大多数の霊長類の種内子殺しが、同じ様相を呈している〉とも述べている。¹⁸

類人猿の〈子殺し〉行動から言えば、葉子は、窪川に惹かれていく母親と自分を拒む窪川との間で、生命の危機に瀕していたと言わなければならない。結果として葉子が生き延びられたのは、佐多が「年譜の行間」述べているように、佐多の父母が引き取って我が子のように育てたからである。¹⁹ 窪川による葉子拒否の事象は、霊長類の雌雄をめ

ぐるバイオレンスに関わる生物学的な問題であって、窪川を悩ます〈母性愛〉というレベルの生易しいのではなかったのである。

四、父娘関係における近親相姦性

一九四〇年に発表された「素足の娘」の一五歳のヒロインであるとともに語り手〈私〉である桃代は、東京で祖母・叔母・弟と内職で生計を立てていたが、瀬戸内の小さな港町の造船所に書記として働き口を得た父の秀文からの仕送りもなく、儉しい生活を強いられていた。父宛に、いっそのこと雑妓にでもなろうと思うと手紙を出したところ、慌てた父から呼び寄せられて相生の地にやって来る。

第二章には、桃代が父の一九歳の時に出来た子供であって、しばしば自分が若い恋人と見まがわれることについて次のように思う。

いつか父と私が東京で肉屋へ御飯を食べに入いった時、父親の顔なじみの女中は、私をちょっと傍へ除けるよ
うな口振りで、

「佐多さん、あんまり若いでしょう」

と、含み笑いを押えて、つん、とした顔をして見せた。兄弟どころでなく、危くすると情婦に見間違えられるのであった。そして気持の上でも、普通の親子にはない一種のへだたりと遠慮と、素っ気なさや容赦のなさ、それでいて、対等に認めるような愛情と父親のそういう愛情に対して、私もまた理解のある同情を示すといったようなものがあった。²¹

第四章では、父の長崎の造船所時代の知人で、父を頼って相生にやって来た川瀬と三年ぶりに再会する場面がある。川瀬が来た当日の夜、父は川瀬を連れて外に出て、夜更けに帰宅する。それまで桃代は父と二人して一つしかない蒲団で過ごして来たため、酔っぱらっている父の提案を受け入れて、仕方なく川瀬と三人で一つの蒲団で寝ることになった。桃代は今までどおり父と枕を並べ、二人の足の方から、川瀬が身体を差し入れるという形で蒲団に入った。

「桃代、要心せにゃいかんよ。川瀬君は口がうまいからな。うっかり引っかからんようにせんと。川瀬君は、もう奥さんが長崎にちゃんとおるんだからな」

私は、ばあっと顔の赧くなるのを隠しようがなかった。父の言葉は、まるで、私の心の裡を見透しての、先廻りのような言葉なのだ。父親にこんな神経があるのだ、だけど、それを何も、川瀬の面前でずけずけと言わなくてもいいのに、と、川瀬に対して目のやり場のないような恥ずかしさで、私はうろろうろした。²²

貧しさゆえか、無神経なのか、思春期の娘と同衾して、挙句に酔った同僚も同じ布団で寝させる父親が、娘の異性に對する感情の芽生えを感じとって、牽制する様子が語られる。親としての庇護心からするものではなく、異性としての嫉妬心からであろう。秀文は桃代が八歳のとき、妻のおゆりと死別した後、再婚を繰り返している。桃代は、長崎での二度目の継母と父の關係について第五章で次のように語る。

いつか私が二階へ上がってゆくと、父は夏江という新しい妻の膝に頭をのせていた。父はやはり、「夏江さん」と呼んでいた。その時、二人は何かくすぐるような笑いを一語に上げていた。夏江は竹の耳搔きを持って、父の耳を掃除してやる場所だったらしい。が、九歳になっていた私は、自分の知らぬ父をそこに見たように思っ、そっと胸に収める嫉妬を抱いた。²³

さらに、桃代は、芸者と遊ぶ場所に九歳過ぎの子供の自分を伴い、あろうことかレストランでリキュールを舐めさせる父親と、それを受け入れる自分の關係を「おかしな父娘」だったと述べている。アダルト・チルドレンとしての娘と若い父親との間の心理的な近親相姦關係が見えてくる。

第九章では次のように語られる

どうして、親身の父親と暮らすのに、こんなに窮屈なのであろう。父の御飯ごしらえをし、酒の対手をする、そんなことは勿論いい。けれども私は窮屈でしようがない。何故、肉親の父だというのに、こんなに何かよそよそしい速慮があるのだろうか。私は父親の肩に甘えた掌をおいてみたことがない。明けっぴろげなおしゃべりをしたこともない。父はいつも見ないようなふりをしていて始終不満そうに眉を顰めている、かと思うと、まるで對等に、私にもたれかかるようなものの言い方をしたりする。かと思うとまた、娘をも自分をも哀れがるような悲しい表情をする。もっと父親がおじいさんだったら、どんなに親しい気がするだろうに、と私は思うのだった。²⁴

いわば、アダルト・チルドレンの桃代とピーターパン・シンドロームの父親、間合いの取れない若い父と娘の不幸というべきものであろう。父との若すぎる恋愛・出産・結婚による母の死、父の放縦、就職困難による一家困窮という

境遇の中で形成された固有の父娘関係である。

強いられた弱年労働から解放された相生の生活は、思春期の桃代に自立への希求、性の芽生えを喚起する。桃代と身近に接する秀文もそのことを感じないわけではなかった。第九章では〈私の胸の中の、この誰かに見られたい、という欲求は、手綱を引き締めても引き締めてもはね出す奔馬のように押えようがなかった。父はそれを感じていて、少しでも私が外へ視線を向けるようなことがあると、苦った顔をした。〉²⁵とある。第二章では次のように語られる。父親は私をつれて散歩しているとき、ふいにうしろを振り向いて、

「紅はもっと薄くしないか」

と、気の毒そうに言ったことがあった。

父は、酒を飲んでいない時は、こんな時、気の毒そうに言うのであった。私は自分の痛いところを突かれたように羞ずかしくなっていて、上目に父を見ながら、そっと唇の紅を舌で舐め取る。(略)父の満たされぬ毎日を、私の、新芽の匂うような本能的なざわめきが乱すのではなからうか。父は、私の娘らしい成長ぶりを親の愛情で受け入れる余裕がなくて、もっと荒々しく感じるのではあるまいか。満たされぬ若い男としての彼の官能は、娘のふくらんだ生々しさで、何かそえられるような落ちつきが無さとなるのではないかしら。²⁶

さらに、第一章では、ある夏の夜、酒に酔った勢いで、秀文が隣室の藤井と桃代の仲を疑う場面がある。

「藤井と、何かあるんだらう」

私は急に、厭らしいものが身内を走るのを覚えた。厭らしさは、藤井という名なのか、その疑いなのか、父の表情なのか、その全てのものごっちゃになったものだった。

「まあ、あんまりだわ」

言いながら私は、手元にあつたお櫃の上に袖で蔽うた顔を伏せて泣き出した。そんなしぐさでもしなければ受け応えがでなかつたのである。(略)父はそれでもまだ続けた。

「ふん、なかなかお芝居はうまいねえ」²⁷

桃代は、ありもしない藤井との仲を疑う父親に〈嫉妬〉を見たという。男親一般の娘の男に対する複雑な感情ではなく、秀文のそのときの異常な言動に、男としての近親相姦レベルの嫉妬を見たのである。

竜岡の紹介で見合いをした今度の結婚は上手く行くようで、秀文も満更ではなく、桃代も継母と仲良くやって行けそうだとしたことになった。桃代は今度の継母には嫉妬も全くない。(県立の女学校)出身ということの満足感も語られる。父娘の近親相姦の危険は、こうして回避されることになる。東京の祖母からは、しばしば手紙が来ていた。秀文が再婚して暮らしを立てているのに、自分達を放擲していることに立腹し、東京を畳んで相生に来るといふ。桃代は祖母と秀文のそれぞれの心を忖度して、東京に帰る。銀座の不二書店の店員として、祖母を励まして健気に生計を助け、働く桃代の暮らしぶりとともに、継母からの手紙によって、相生の造船所の(資本主が破綻に陥り、神戸の或る会社に合併されること)になり、町が急激に寂れていく様子が語られてこの小説は終わる。

父親は桃代を相生に呼びつけるが、親たるものとして何の成算もなく、相変わらず、再婚生活に腐心して東京の祖母一家への顧慮もない。さらに帰京するという桃代の言葉を、勿怪の幸いと受け止め、専ら責任回避に走るばかりである。

四、レイプ

「素足の娘」第一六章から一七章にかけて、父親の再婚話と桃代の帰京の間に小説の大きな山場がある。隣室の藤井との仲を猜疑した秀文の(お前が嫌いだって、先方がいたずらすることはあるだろう)という危惧が現実のものになった如き、川瀬との体験が設定されている。桃代は、造船所が主催する社員・家族慰安会の松茸狩りに遅刻し、道に迷った挙句に川瀬と行き会い、性的初体験をすることになる。その場面は次のように語られる。

父親の親友でもあり、また子供の時から知っている故もあって、私は川瀬に親しい気持ちを持っていた。もし彼に奥さんがなかったならば、私の空想の中の一人に勿論彼も加わっているにちがいがなかった。そしてその中では一番現実的に、親しみのある一人にちがいがなかった。(略)

川瀬の身体は私のすぐそばにあったから、川瀬が私を見ている顔もすぐ真上にあった。川瀬は、視線を反らして、「少し、休んでゆこうか」

「ええ」

私は何故だか、そう返事をするのに声が今までのように自由に出ないのだった。(略)

川瀬が手をうしろへ廻して私の手をとった。大きな手であった。彼はその手を、いきなり、きゅうっと強く握った。私は本能的に手を引こうとしたが、彼は知らん顔でそのまま離さずに引いて行つた。私は言葉に現わさぬ秘密の通わされるのを知って、手を引かれて歩きながら、うしろから川瀬の顔のあたりを見た。彼は飽くまで知らん顔をしていた。私は自分たちの小笹や落葉を踏む足音をこわい、と思った。(略)

彼はまた、

「こわいの？」

と、言った。ちらりと見ると、川瀬の目は、泣く一歩手前のような、何だか哀願するような、気弱いまたたきをした。

「しばらく、こうしていよう」

川瀬はそう言つて、私の身体を膝に抱いた。私は私の身体のかまかく慄えるのを、相手に気づかれるのが厭だつたけれど、どうしても、慄えはとまらなかつた。(略)

私には、何の感応もなかつた。ただ私には抵抗するなど思いも及ばぬような失われた意志があるばかりだつた。感覚的には嫌悪の戦慄が身内を走っていた。彼はもう、私に言葉などかけなかつた。(略)

川瀬は、私の着物の泥を払ってくれた。男の、荒々しい振舞いの後に、男の、またこうした優しさのあることも始めて知るのだった。念を入れて結つた髪も、念を入れて結んだ帯も悲しいばかりだつた。私は彼に背を向けて頭へ手を上げながら、また恐怖の去らぬ胸の慄えで、がくがくと齒が鳴るのだった。

「ちゃんとしなさい。人が変に思うといけない」(略)

川瀬は、長い脚を立てて、煙草を喫い始めた。すると不思議に、川瀬はもう私に優しくして呉れないのか、と、すっぱかされたような淋しさが湧くのであつた。そして私はふいに父を思い出した。私は父を、遠くへ置きざりにしたような気がしてきて、父が可哀想になるのであつた。川瀬は煙草の煙で目を細めるようにして、

「もう一度、ここへお座り」

と、やはり優しい声で言つた。

私は、顔を川瀬の手の上ののせても、目は執拗にうつむけていた。

「ね、僕と、嬢ちゃんとの秘密。ね、分ったね」

私は、うなずいたけれど、拗ねたように決して視線を上げはしなかった。²⁹

桃代は川瀬に抵抗せず、川瀬も暴力を振るったわけでもない。しかし桃代は一五歳、今日から見れば未成年に対する猥褻行為として、明らかに犯罪の領域に入る。宮淑子『セクシュアリティ・スタディーズ』に拠れば、現代日本の報告されたレイプの約半数が、被害者と加害者は顔見知り以上の関係がある。被害者の一〇二割は、親しい友人や家族の一員にレイプされたと報告している。³⁰〈強姦事件では、かなり会話がかわされ〉〈会話を交わすことによつて、加害者は相手に対する支配を高める。この実態から、多くの場合レイプの加害者は、理性を失わずに犯行に及んでいることがわかる。〉³¹とある。川瀬の行為と重なるところが多い。

さらに、桃代は事後に父親を想起している。父に秘密を作ってしまったこと、父の同僚との性交渉によって父を裏切ったという罪意識が示される。それはまた、父親との近親相姦関係に、別の男の闖入を許したという後ろめたさでもあっただろう。

第二八章では、桃代による川瀬誘惑の場面がある。桃代は、ある日、自宅からひとりて相生の友人宅に遊びに行く。その帰途、大粒の雨に遭い、近くに川瀬の家があるのを思い出して雨宿りのために立ち寄る。川瀬は風邪で昨夜から発熱し、妻は病院に薬を取りに外出中であった。二人だけの場面は次のようなものである。

何かを待っている。その戦くような感覚だけになった。私はそういうものを全部、川瀬の前にさらけ出していた。私は自分の、ごくっ、と唾をのみ込む音を聞いた。その音は川瀬にも聞こえるであろう、と思った。聞こえても構わない、と思うのだった。私の足の平はじっとり汗ばんでいた。私は当然川瀬もまた、そういう私を受け入れてくれるものと思っていた。(略)彼は蒲団の中から顔を差し出して、

「雨はやみそうにないね。傘を持ってゆきなさい。裏の縁側の戸棚に入っているはずだから、あんた出して下さい」

はっ、と私は立ち上がった。まだ川瀬の言葉が終わらぬうちに。はっ、というのは気持のことではなくて動作のことである。私は機械人形のように立ち上っていた。そして川瀬に指されるままに縁側の戸棚を開けていた。(略)川瀬は私の姿体に溢れさせた感情を全部感じとったにちがいない。今頃は何とおもっているだろう。

川瀬は私を避けたのだ、ということとは明らかに分った。

——川瀬は、やっぱりいい人なのだ——

と、私はふと思うのだった。私は初めて、川瀬を許すような気持ちになつて来た。³¹

桃代は、松茸狩りの一件後、初めて川瀬と会い、誘惑する。川瀬は桃代に乗つて来ず、桃代は彼が好人物であることを確認する。佐多はもう一度、第三〇章において、桃代の上京の日に合わせて桃代と川瀬の邂逅と別れの場面を設定する。車中の会話は弾まず、川瀬は神戸で下車する。桃代は、川瀬を〈二度、三度〉見、〈強い視線〉浴びせ、心中に〈何か腹立たしいもの〉を残した。しかし立ち去つたと思つた川瀬が、桃代のために弁当とサンドイッチを買つて来る。川瀬がお茶の壺を渡す際、二人の指が触れ、思わず桃代が手を引こめ、壺がホームに落ちて壊れる。割れた茶壺に二人の永訣を象徴させて終わる。川瀬が下車する際に抱いた桃代の怒りや非難は鎮められ、松茸狩りの出来事は、お互い一時の悪戯として置きたいという大人の男の巧妙さも後景に退き、川瀬は良い人だという桃代の気持だけが残る。

五、許す佐多

佐多は「年譜の行間」において、葉子を虚仮にし、葉子から母を奪つた窪川について、〈こちらは我儘だと思ふけれど、相手にしてみればこの女と一時間でも多くいたいという情熱だけなんですもの。彼としては仕方がなかったんでしよう。だからそんなややこしいのに付き合つて、窪川さん、ご苦労さまだった。〉〈あの人、いい人ですから。それはあとになって言えば、しょうがないところあるけど、いい人なのよ、悪い人じゃないもの……〉³²と述べて、窪川のドメステイック・バイオレンスを恋情のなせる業として許している。また無責任で放縱三昧であつた父親田島正文について、早すぎる恋愛結婚・勤務先における不如意のしからしむるところとして許している。さらに川瀬のレイプ³³を彼の人柄で許してしまう。しかしながら、今日から見れば、いつれの一つをとつても重大なハラスメントと認定される事象である。

佐多の祖母タカは、佐多の幼少期から、少女期にかけて佐多や弟を父親に代わつて養育し、窪川との結婚後のプロレタリア活動期・戦時下の困窮期さらには、南方徴用期の留守宅を守つて窪川と佐多との間に出来た長男・次女を育

た。にもかかわらず、佐多はエッセイや小説などで、タカに対して冷たい眼差しを向け続けた。祖母の死去に際しても、佐多は徵用先のスマトラから帰国することもなかった。タカの持つ没落小市民としての零落意識と屈折した矜持が、〈小市民根性〉の克服を自己に課して来たプロレタリア作家の佐多には耐えられなかったであろう。祖母への眼差しが漸く緩むのは晩年の短編「歌の跡」である。³⁴ 祖母への眼差しに比して、これまで見てきたように、父正文についてのそれは優しい。正文は、職場不如意の憂さ晴らしに尺八を吹いた。一時は生計を立てるため、流しの演奏もし、師範として教えるような腕前であった。「素足の娘」の桃代も、再上京後の書店の店員時代に抱え込んだ鬱屈を晴らすためにマンドリンを習う。佐多も一九六四年の再除名前後に三味線を習って、精神のバランスを保った。父親と極めて近い資質を持つ自分を許したのであろうか。葉子を胎内に宿した佐多を連夜奇んだ小堀槐三を措いて、中野重治は言うに及ばず、不倫を繰り返して離婚された窪川や、一度は党内で敵対した西沢隆二にも優しい。封建的な因習と礼節の遺制がむしろ美風として強調された戦前・戦中期にあって、男性を立て、自らを抑制する姿勢は、おそらく大半の日本女性の姿であって、佐多がひとり男性に甘かったわけではないのだろう。女性としての時代的制約のもとにありながら、佐多は数奇な実人生における男性関係を小説化することによって、今日ようやく問題視されて来た男女のセクシュアリティについて先駆的な光を当てていたと言える。

注

- 1 「灰色の午後」〔『群像』一九五八年一〇月～一九六〇年二月〕
- 2 「灰色の午後」〔『佐多稲子全集 第一〇巻』講談社 一九七八年九月〕 四九頁。
- 3 2に同じ。一三三頁。
- 4 たとえば、外村繁「浴標」〔『群像』一九六〇年七月〕
- 5 「キャラメル工場から」〔『プロレタリア芸術』一九二八年二月〕
- 6 「キャラメル工場から」〔『佐多稲子全集 第一巻』講談社 一九七七年一月〕 一三三～一三四頁。
- 7 注6に同じ。三〇～三二頁。
- 8 「乳房の悲しみ」〔『婦人公論』一九三七年三月五月〕
- 9 「乳房の悲しみ」〔『佐多稲子全集 第二巻』講談社 一九七八年一月〕 二九五頁。

- 10 「ある女の戸籍」(『婦人民主新聞』一九四六年八月二日) 四七年九月二五日)
- 11 「ある女の戸籍」(『佐多稲子全集 第四卷』講談社 一九七八年三月) 一六八頁。
- 12 「樹々新緑」(『文芸』一九三八年四月・五月)
- 13 「樹々新緑」(『佐多稲子全集 第二卷』三八六〜三八七頁。
- 14 注13に同じ。三九九〜四〇〇頁。
- 15 注11に同じ。一八八頁。
- 16 『年譜の行間』(中央公論社 一九八三年一〇月) 二二五〜二二六頁。
- 17 杉山幸丸『子殺しの行動学』(講談社学術文庫 一九九三年一月)
- 18 注17に同じ。二九〇頁。
- 19 注16に同じ。一二七頁。
- 20 『素足の娘』(新潮社一九四〇年三月)
- 21 「素足の娘」(『佐多稲子全集 第三卷』講談社 一九七八年二月) 一二頁。
- 22 注21に同じ。二五頁。
- 23 注21に同じ。二八頁。
- 24 注21に同じ。四六頁。
- 25 注21に同じ。四六頁。
- 26 注21に同じ。五九〜六〇頁。
- 27 注21に同じ。六九〜七〇頁。
- 28 注21に同じ。七〇頁。
- 29 注21に同じ。七五〜七九頁。
- 30 宮 淑子『セクシュアリティ・スタディーズ』(新水社 二〇一〇年一〇月) 一九六頁。
- 31 注21に同じ。一二四〜一二五頁。
- 32 注16に同じ。一二八頁。
- 33 注7に同じ。四七〜五〇頁。佐多は川瀬と桃代の一件がフィクションであって、そのことでモデルの河瀬氏に迷惑をかけたと述べている。たとえば、『佐多稲子全集 第三卷』四〇一頁・『年譜の行間』四七頁。
- 34 「歌の跡」(『海』一九七七年九月)

Sexuality in discourse in the works of
Sata Ineko: in 'Kyarameru Kouba,'
'Suashi no Musume,' 'Aru On'na no
Koseki,' *Nenpu no Gyokan*'

Akio KITAGAWA

Sata Ineko writes sexual intercourse between a man and his wife explicitly in 'Hai-iro no Gogo.' For a female author who started writing in the early Showa, it was very rare. By examining incestuous relationships, domestic violence and rape in discourses found in Sata Ineko's 'Suashi no Musume,' *Aru On'na no Koseki*, 'Nenpu no Gyokan,' this paper discusses how she was ahead of her time and about the peculiarity of her work.